

# 第四章 富士宮の動物

## 第一節 どんな動物がいるか

静岡県は生物多様性の豊かな場所である。東西に幅広く、富士山や南アルプスという日本を代表する高山があり、また日本の中心的な位置にあることから、南方系・北方系いずれの要素のものも見られるため、生息・生育する生物の種数がたいへん多い。

令和二年（二〇二〇）に静岡県が「静岡県野生生物目録」を公表しているが、それによると哺乳類六〇種、鳥類四二一種、爬虫類一九種、両生類二一種、淡水魚類一八六種が記録されている。これら脊椎動物については、富士宮市域にどんな種が生息しているかおおむねわかっており、これらについては次項より順に述べる。

一般に「動物」というとこのような「脊椎動物」、もしくは「哺乳類」を想像する方が多いと思われるが、それ以外にも多くの小さな動物たちが存在する。陸地や淡水に限っても、節足動物（後述する昆虫類の他、クモ類、ムカデ・ヤスデといった多足類、エビ・カニ・ダンゴムシといった甲殻類を含む）、環形動物（ミミズ・ヒルなど）、軟体動物（カタツムリ・ナメクジ・タニシなど）、扁形動物（コウガイビル・プラナリアなど）、線形動物（線虫類）、類線形動物（ハリガネムシ類）、緩歩動物（クマムシ）などが陸上にすんでいるし、加えて淡水中には海綿動物（淡水海綿）、刺胞動物（淡水クラゲ、ヒドラなど）、輪形動物（ワムシ）、腹毛動物（イタチムシ）、外肛動物（コケムシなど）などが、静岡県内に生息していると考えられる。

前途の動物群はほぼすべて生物分類学上の「門」という階級に当たる分類群である。生物の分類には、界門綱目科属種という必須の階級があり、例えばツキノワグマという「種」は、動物界脊索動物門哺乳綱食肉目クマ科クマ属に分類される（脊索動物門は脊椎動物十ホヤ類十ナメクジウオ類からなる）。こうしてみると「門」という階級がいかに大きくくりの分類であるのかがわかっていただけるだろうか。

では、こうしたさまざまな動物群の門のメンバーについて静岡県や富士宮市域にどんな種が生息しているかということについては、昆虫の一部と陸生・淡水生の貝類を除けば、ほとんど分かっていない。こうした動物のほとんどは人目につきにくい小さなものであり、研究する人も少なく、その生息の実態は日本全国という規模でも地域レベルでも未解明のことがたいへん多いのが実情である。

### 富士宮市の動物相の特徴

富士宮市域には東側に富士山があり、西側には毛無山・長者ヶ岳・天子ヶ岳などに代表される山梨県境に位置する天子山地、それらの間には朝霧高原など広大な富士の裾野が位置している。また田貫湖のような広い開水面や富士川・芝川などの河川といった陸水環境があり、小田貫湿原のような湿地環境も存在する。またヒノキ・スギの植林地、畑地や水田などの農耕地、そして市街地など多種多様な

環境が存在し、それぞれの環境に独自の生態系が成立し、動物たちがくらししている。ここでは富士宮市の動物相の顕著な特徴について述べる。

### 垂直分布の面白さ

富士宮市には海岸線がないので、海洋性・海岸性の生物は存在しないが、海拔二六メートルから富士山の山頂までの、ひとつの市町村では日本一という標高差を有しており、標高差に応じた動物の垂直分布が見られるのが大きな特徴である。

気候帯で見ても低標高から高標高に向けて暖帯・温帯・亜寒帯と移行し、富士山の森林限界を超えた高山に至る。また植生も気候帯と合わせて照葉樹林、落葉広葉樹林、針葉樹林の亜高山帯・高山帯と変化し、それぞれの植生に適応した動物群集が成立しており、それらが連続的に観察できる貴重な場所となっている。垂直分布については、さまざまな動物群で見られるが、特に鳥類では山を登りながら、その移り変わりを観察することができる（本章第三節）。

また、モグラの仲間である食虫類の地表性種であるヒミズとヒメヒミズの関係も標高に関連した興味深い現象が観察される。ヒメヒミズはヒミズよりも体が小さく、この二種は一般的に競合するとヒメヒミズが駆逐されてしまう。そして多くの場合ヒメヒミズが高標高地においやられ、低標高にはヒミズ、高標高地にヒメヒミズという分布パターンができあがる。しかし、新しい溶岩に覆われている場所にはヒミズが侵入できないらしく、こうした場所では低標高地にもヒメヒミズが高密度で生息していることが多い。単なる標高の違いのみならず、溶岩の存在が動物の分布を規定している富士山ならではの現象である。

### 少ない高山性動物

富士山は誰もが知る日本一高い山であるが、意外なことに高山性の生物がほとんど存在しない。その理由は富士山が新しい山であることだ。現在、日本アルプスの高山などに見られる高山性生物は氷河期にはより低標高の土地に広く分布していた。それが氷河期の終末とともに、高標高地に登りはじめた頃、富士山は活発な火山活動を行っている最中であり、火山灰や溶岩に覆われた大地は、そうした寒地性の生物たちの避難地になりえなかったのだろうと考えられる。

ただし、亜高山から高山帯に見られるホシガラスのような種が生息している、鳥類は羽により自力で飛んで来ることが可能なので、生息域を拡げてきたものと考えられる。また、昆虫の節で後述する蛾類のフジシロミヤクヨトウは富士山五合目付近が日本で唯一知られている生息地である。例外的に見られる高山性の動物としてコバネヒナバッタがあげられる（本章第七節）。このような高山性生物は富士山の溶岩が到達しなかつたわずかな場所での生息をつないできたものたちの子孫と考えられる。

### 消えゆく草原性の動物

富士西麓に広がる朝霧高原は草原性の動物の貴重な生息地であった。日本の温帯では自然に草原が維持されることはほとんど無く、長く草原生態系が維持されていた場所のほとんどは人為の介在があった場所である。富士山周辺の裾野には広大な草原を見ることができ、こうした草原環境は、富士山の噴火の後に溶岩や火山灰に覆われた環境に自然に生じた一次草原を基として、その後、火入れや草刈などの生活のための人々の営みが継続的に行われることによって存続してきた「里山」的な二次草原である。

こうした草原に生息する生物は、大陸内陸の比較的乾燥した地域に見られるものが多く、日本列島が今より冷涼だったころに大陸から渡ってきて繁栄していたものたちの生き残りだ。しかし、近年、人の生活様式が変化することに伴い農林業の形態も変わり、「里山」から人の管理が消え、草原が維持されなくなってきた。具体的には粗放的な牧畜が行われ灌木かんぼくの点在していた生物多様性が高い草原であった場所が、管理の行き届いた牧草地に変わったことや、採草や火入れの行われなくなる場所が増えると、人の手により保たれていた草原がやぶ化、樹林に遷移していく。そのような背景から、急速に草原性の生物が減少しており、それらの多くは絶滅危惧種にあげられるようになっていく。鳥類の節（本章第三節）で述べられているが、県内では富士山麓が唯一の渡来地である夏鳥のオオジシギ（環境省レッドデータブック・準絶滅危惧種）とアカモズ（環境省レッドデータブック・絶滅危惧ⅠB類・静岡県レッドデータブック・絶滅危惧ⅠA類）が朝霧高原では見られなくなっているという。チョウ類でも朝霧高原は草原性種の重要な生息地であるが、いくつもの種が地域絶滅してしまった。

### フォッサマグナと関連する興味深い分布

富士山やその周辺は南部フォッサマグナに位置している。フォッサマグナは本州の中央部を南北につらぬく大地溝帯で、少なくとも六〇〇万年前頃までは海であり、太平洋と日本海を結ぶ海峡であった。陸生生物の多くはこの海峡を渡ることができず、分断されていたものと考えられる。その後陸化して陸生生物の往来が可能になり、フォッサマグナの東西を由来とする動物たちは混じり合っていたと考えられるが、その頃の分断に由来するとみられる興味深い分布が認められる。

代表的なものは、西日本に分布の中心のあるコウベモグラと東日本に分布の中心があるアズマモグラである。この分布の成因の元にはフォッサマグナの存在がありそうだ。そしてこれらの分布境界では、両種の競争が起こり、現在でも分布域が変化する現象が知られている。長野県諏訪地方ではコウベモグラがアズマモグラを駆逐し、一〇年間で一六キロメートルも分布を拡大させた事例が観察されている。富士宮市でも朝霧高原において、コウベモグラとアズマモグラの混成地が見つかっており、これらの種間関係についての詳細な研究はないものたいへん興味深い場所である。

また、南部フォッサマグナに特有の種も見られる。第四節で紹介されているオカダトカゲはその代表的なもので、伊豆諸島・伊豆半島から富士山南麓にかけて分布している。伊豆半島はかつて海上に誕生した火山島を起源として、拡大しながら本州に衝突した陸塊であり、オカダトカゲはそうした大地の動きに連動して成立・分布を形成したのと考えられる。また富士宮市をはじめ富士山南麓では、オカダトカゲが分布の境界を接するヒガシニホントカゲと交雑を起こしていることもたいへん興味深い。

この地域での近縁種の交雑に関連して、後翅こうしが退化した甲虫のオアリガタハネカクシ属についての話題もある。南部フォッサマグナに分布するクロサワオオアリガタハネカクシと東日本に広く分布するルイスオオアリガタハネカクシの富士西麓での分布境界は、富士宮市滑沢なめさわにおいてほぼ直線的にあることが示されている（『富士宮市の自然』（一九九五））。また、このなかで一カ所でのみ二種の混成地も報告されている。この二種のハネカクシは山梨県丹波山村の混成地において、雑種の形成が報告されており、富士宮においても交雑が起きている可能性があり、今後の調査の進展が楽しみである。

## 外来生物などの新規侵入種

人間が持ち込んだ外来生物が各地で大きな問題となっている。富士宮市域でも多くの外来種が見つかっており、そのなかには侵略的となり、人間生活や生態系に大きな影響を与え、外来生物法で規制されるオオクチバスやアライグマなどの「特定外来生物」も生息している。人間が持ち込んだこうした侵略的外来生物は、人間が防除し根絶を目指すのだが、しばしばたいへん困難である。

しかし、根絶に成功した事例もある。その一つが田貫湖で昭和六〇年（一九八五）に最初の野生化が確認されたカナダガンだ。その後繁殖を繰り返して山梨や神奈川などにも拡大し一〇〇羽を超えたが、その後、捕獲と卵の除去を継続し、平成二七年（二〇一五）に最後の一羽が捕獲され、国内では根絶されたと考えられている。この事例は定着の初期に、多くの方々の努力で根気よく防除を続けることができたための成功であった。

平成一七年（二〇〇五）に施行された外来生物法は、生態系、人の生命身体、農林水産業に被害を及ぼす、もしくは及ぼすおそれのある侵略的外来生物を政令により特定外来生物に指定し、それらについて、飼育・保管運搬、輸入、野外への放出、譲渡や販売などの行為が禁止されている。また、特定外来生物には指定されていないが、取り扱いに注意が必要な「生態系被害防止外来種」がリストアップされている。ペットとして親しまれ、各地に分布しているアカミミガメとアメリカザリガニが、令和五年（二〇二三）より新たに飼育は可能なものの、輸入や野外への放出、販売などが規制される「条件付特定外来生物」に指定されるので注意が必要である。

外来生物の被害拡大防止のためには、入れないことや逃がさないこと、そして捕獲などの防除とともに、侵入をいち早くとらえるモニタリングの実施も重要である。

## 多様な動物をはじめとする生物多様性の保全

生物多様性という概念は、多様な生物が存在し、それらが関わり合っていることを包括的に指すものである。二〇世紀の後半から、生物多様性の重要性とその保全の必要性が話題にされることが多くなった。人類の存続の基盤としても生物多様性は必要不可欠なものである。一例をあげると、私たちの食料はほぼすべてが他の生物に依存しており、農林水産業が維持される基盤としても、良好な生態系や生物多様性の保全が大切であることは明らかである。一方で、開発などの人間活動が生態系に影響を与え、生物多様性の劣化がさまざまな場面に現れ、こうした劣化を減速し、生物多様性を回復させることが必要であると叫ばれている。こうした動きを支えるものとして、国レベルでは生物多様性国家戦略が策定されている。この国家戦略は平成七年（一九九五）に最初に策定され、以降数度のアップデートを重ねている。また、地域レベルでは静岡県が「ふじのくに生物多様性地域戦略」を平成三〇（二〇一八）に策定し、おおよそ一〇年間の目標や施策を記載しており、その中には市民の役割も記されている。また、県内の自治体でも独自の生物多様性地域戦略を作成するところも出てきており、行政・市民が一体となった多様性保全がより進むことを期待したい。

以上、ここに述べ、次節以降で語られるように富士宮市域には、興味深い動物相や群集が存在し、未知の種や詳しい研究が俟たれる興味深い現象も数多く残されている。また、生物多様性の保全については、重要性が認識されてきているところではあるが、実効的な対策についてはこれからのさらなる推進が必要である。かけがえのない動物たちの生息できる貴重な自然を守り、次代に伝えていくことは、現代を生きる私たちの大きな責務と言えるだろう。

## 第二節 富士宮市の野生動物（哺乳類）

富士宮市は、市域に富士山や天子山地を含み、奥山、中山間地（里地里山）、平地に広がる市街地など、多様な環境から成り立っている。このような環境の下、野生の哺乳類では、多様な種が生息しており、本州で見られる種の大部分が生息している。

大型の種では、ツキノワグマ・ニホンジカ・カモシカ・イノシシ、中型の種では、タヌキ・キツネ・アナグマ・ニホンザル・ニホンノウサギ・テン・イタチ・ニホンリス・ムササビ・ハクビシン・アライグマ、小型の種では、ヤマネ・ヒメネズミ・アカネズミ・カヤネズミ・モグラ・ヒミズ・ジネズミ・コウモリ類などが生息している。

### 富士宮市に特徴的に見られる種

#### ニホンジカ（写真4-1）

シカは縄文時代には、イノシシとともに常食された。シカはカノシシとも呼ばれるが、シシとは肉、あるいは食用の獣の意味である。鎌倉時代にも、巻狩りなどでイノシシとともに猟の対象とされた。富士宮市の地名にも、「大鹿窪」と鹿がつく地名がある。『富士宮市史 上巻』（一九七二）では、鹿の頭数が減少しているとの記述があるが、近年は急増している。富士宮のシカは、本州に広く分布する在来種のニホンジカ（ホンシュウジカ）で、四つの胃袋を持つ反芻獣である。反芻とは、胃の中に入れて食べた食べ物を口に戻して噛むことを意味する。シカは、草だけでなく、樹葉や樹皮も食べるため、牧草を含めた農産物や森林被害が深刻化している。森林の下草などを食べつくすことで、生態系の破壊や土砂崩れなどを引き起こしているため、個体数調整などの対策が行われている。

#### イノシシ（写真4-2）

イノシシもシカと同様に、古くから富士宮市域に数多く生息する。猪之頭など猪の付く地名も見られるが、「井の頭」が語源との説もある。

鎌倉時代には、武士の鍛錬として巻狩りが行われたが、その獲物はイノシシやシカだった。佐折地区から北山・赤焼にかけて部分的に残る土手は、巻狩りの際にイノシシなどを追い詰めるために使われた「猪土手」であるとの伝承もある。また、全国各地にはイノシシやシカによる農産物被害を防ぐためのシシ垣が見られるが、「猪土手」もそれに該当するとも言われている。

イノシシは在来種で、単胃・雑食で繁殖力が強い。近年は豚熱に感染した野生イノシシが、ブタへ感染させる事例が全国的に増加しており、その対策が急がれている。

#### カモシカ（写真4-3）

富士山や天子山地などに生息している。国指定の特別天然記念物で、狩猟や捕獲が禁止されていることもあり、全国的に分布域が拡大し、奥山だけではなく、山麓や農地周辺でも見られることがある。ウシの仲間である草食性のため、反芻を行う。雌雄とも短い角があり、毎年少しずつ成長し、生え変わることはない。群れを成すシカと異なり、単独行動をすることも特徴である。



写真4-1 ニホンジカ



写真4-2 イノシシ



写真4-3 カモシカ

## タヌキ(写真4-4)

市街地も含め、市域に広く生息しているが、標高の高い場所には少ない。人間にとって身近な動物と言えるが、日中に姿を見かけることはまれで、石や木の下の隙間、家の床下や倉庫といった物陰で休息し、夜間に活動する。果実・昆虫・カエルなどを食べる雑食性で、人間活動によって出される野菜くずや、生ごみなども餌としている。

近年は、疥癬(かいせん)(ダニによる皮膚病)により、全身の毛が抜け、皮膚が象のようになり、衰弱死する個体も見られる。

## ニホンノウサギ(写真4-5)

うさぎ追いかの山、と「故郷」の歌詞にあるように、里地里山を代表する種である。山地・草地・農地・河川敷などに広く生息しており、朝霧高原の草原などでも良く見られる。しかし、とても速く走り、全身茶褐色のため、人間が気付かないうちに草陰などに隠れてしまう。

草食性で、植物の葉・芽・樹皮などを食べる。

## ニホンリス(写真4-6)

樹上で生活するため、まとまった樹林地がある富士山麓や天子山地などに生息している。お腹の毛色は一年中白く、夏の背中も赤褐色、冬は灰褐色になる。木の実、植物の葉・芽などを中心に、昆虫なども食べる。日中に木から木へと移動しながら採食するが、小型で動きが速く、樹木の色が保護色となり、人間が気付くことはまれである。クルミやマツの実(松ぼっくり)が好物で、種をかじり取られた松ぼっくりは、エビフライのような特徴的な形になる。

一方で、近年、マツ枯れがまん延し、マツの木が減少しており、

ニホンリスへの影響も懸念されている。

## まれに見られる種

### ツキノワグマ・ニホンザル

両種とも市内での生息数は少なく、富士山の北・東側、天子山地の西側、富士川流域など、市外・県外からの移入個体の存在も考えられる。

ツキノワグマは攻撃性が高い種ではないが、出合い頭に出くわしたり、幼獣を連れてくる時には攻撃してくることもある。人間の存在を知らせる鈴などを携帯し、クマに先に去ってもらうことが重要である。食べ物は木の実や植物の芽、昆虫類などの雑食であるが、人間活動によって出された生ごみや、飼われているニワトリなどを食べてしまうこともある。人間とツキノワグマとの生活圏が重ならないようにすることが必要である。

## 外来種

### ハクビシン・アライグマ

ハクビシンは東南アジア、アライグマは北アメリカからの外来種(人間によって持ち込まれた種)と考えられている。ハクビシンは市内全域で生息しており、アライグマも分布域を拡大している可能性がある。

両種とも雑食性で、木登りが上手く、手先も器用なため、農作物に対する被害が生じている。特にアライグマは「特定外来生物」に指定されており、飼育や野外に放つことが法律で禁止されている。



写真4-4 タヌキ



写真4-5 ニホンノウサギ



写真4-6 ニホンリス

### 第三節 野鳥の仲間

市域の標高差が三七五〇mと全国一を誇る富士宮市には、低地から高山帯にかけて市街地・農耕地・河川・草原・人工林・自然林などさまざまな環境がある。中でも山麓から高山帯にかけて幅広い生物の垂直分布が見られる富士山、市域北部に位置する朝霧高原、西部を南北に連なる天子山系は、富士宮市の自然を特徴づける地域と言える。また、市内には富士川・潤井川・芝川などの一級河川が流れ、この流域は周囲の自然と相まって多くの野鳥たちの生息地となっている。この様に多様な環境をもつ富士宮市では、現在五二科二〇〇種の野鳥が記録されている。

#### 市街地周辺

富士山本宮浅間大社（浅間大社、写真4-8）・潤井川を中心とする市街地では、スズメ・カラス類のほかにシジュウカラ・ヒヨドリ・ムクドリ・ハクセキレイなどが年間を通じて生息している。浅間大社の森では、初夏になるとアオバズクが渡来し、夕暮れ時から特徴のある鳴き声が聞こえてくる。

一九八〇年代後半には浅間大社の森で二〇〇羽を超えるゴイサギの集団繁殖地ができ、鳴き声とフンの悪臭に閉口したもののだが、その後この繁殖地は富士ファイルム富士宮工場の植え込みに移動した後自然消滅し、現在ではゴイサギの姿も声も珍しくなった。

潤井川の星山放水路水門周辺（写真4-9）では、冬になると多くのカモたちが越冬する。マガモ・カルガモ・コガモのほかにオカヨシガモ・ヒドリガモ・キンクロハジロなどが訪れる。潤井川や周辺の水田地帯では初夏になると留鳥（同じ地域に一年中生息して、季節的な移動をしない鳥）のカルガモに加えて、近年はかつて冬鳥

（越冬するために秋に日本に渡来し冬を過ごし、春に北方へ渡っていく渡り鳥）であったマガモが繁殖するようになった。

平成一九年（二〇〇七）の冬に潤井川で初めて確認されたオオバン（写真4-10）は、その後数を増やし、令和二年（二〇二〇）には一五〇羽を超えた。

平成一二年（二〇〇〇）頃から潤井川流域で姿を見かけるようになったイソヒヨドリは、平成二〇年（二〇〇八）に万野原新田、令和三年（二〇二一）には富士山に最も近い栗倉地区で観察された。市街地の建造物での繁殖例も増え、市域での生息が定着しつつある。

#### 富士山二合目周辺

富士山の中腹、標高一〇〇〇m～一六〇〇mの森林は、ブナ・カエデなどの落葉広葉樹とカラマツ・ウラジロモミなどの針葉樹が混在する豊かな森で、多くの野鳥の生息地となっている。（写真4-11）ここでは年間を通じてコゲラ・アカゲラ・アオゲラ・コガラ・ヤマガラ・ヒガラ・シジュウカラ・ゴジュウカラ・ミソサザイ・ホオジロなどが生息している。初夏を迎えるとツツドリ・カッコウ・ホトトギス・センダイムシクイ・アカハラ・クロツグミ・コルリ・コサメビタキ・キビタキ・オオルリなどの夏鳥（繁殖するために春に日本に渡来し夏を過ごし、秋に南方へ渡っていく渡り鳥）が南の国から渡ってくる。冬にはシロハラ・ツグミ・アトリ・マヒワ・シメ・カシラダカ・ミヤマホオジロなどの冬鳥が北国から渡ってくる。

富士宮市域の富士山では、一九九〇年代までは珍しい夏鳥だったキビタキが平成一二年（二〇〇〇）以降徐々に生息数を増やしている。それに続くように平成二七年（二〇一五）以降オオルリの生息



写真4-9 星山放水路水門からの潤井川

潤井川の水面が広がる星山放水路水門の上流は、冬になると多くのカモたちの越冬地となる。



写真4-7 富士宮市の鳥 ヒバリ

かつて郊外の農耕地に麦畑が広がるころはあちこちでその声が聞かれたが、現在では朝霧高原が主な生息地となっている。



写真4-10 潤井川に群れるオオバン

2010年代まではカモの仲間がこの主役だったが、2020年代に入るとオオバンにその座を奪われようとしている。



写真4-8 富士山本宮浅間大社

境内に大木の茂る鎮守の森や富士山の湧水・湧玉池があり、四季を通じて多くの野鳥が生息している。



写真4-11 富士山二合目の自然林

ブナ・ミズナラ・カエデ・ヒメシャラなどの大木が残る富士山中腹の自然林は、野鳥だけでなく多くの動植物の命を育む。

数も増えている。標高一二〇〇mの西臼塚<sup>にしうすづか</sup>周辺は夏鳥として局地的に渡来するマミジロ（写真4-12）・アカハラの生息地となっている。

## 富士山五合目

富士山の森林限界（写真4-13）、標高二四〇〇mに位置する五合目周辺はホシガラス（写真4-14）・メボソムシクイ・イワヒバリ・カヤクグリなど高山に住む野鳥の生息地である。ダケカンバ・ミヤマハンノキ・ナナカマドなどの落葉広葉樹にカラマツ・シラビソなどの針葉樹が混ざる樹林帯は麓より約一か月遅れて新緑が芽吹く。六月末頃になるとこの森では多くの野鳥たちが繁殖期を迎える。クイタダキ・コガラ・ヒガラ・ミソサザイ・ルリビタキ・ビンズイ・ウソなどのさえずりが林内に響き、岩場で繁殖するアマツバメが上空を飛び交う。平成二年（一九九〇）以前には観察例の少なかったハシブトガラス・ウグイスが、最近の五合目では夏季に見られるようになった。

## 朝霧高原

富士山の西麓に広がる朝霧高原（写真4-15）は、市域の北部、標高七〇〇m～九七〇mにある。現在では森林や牧草地となった場所も多いが、この地域を特徴づける環境として高原性の草原地帯があげられる。特に根原地区のススキを主な植生とし、灌木<sup>かんぼく</sup>が点在する草原地帯には留鳥のキジ・ノスリ・モズ・ヒバリ（写真4-17）・ウグイス・イカル・ホオジロなどが生息し、初夏にはカッコウ・ホトトギス・オオヨシキリ・コヨシキリ・アカハラ・コムクドリ・ホオアカなどの夏鳥が渡来する。中でも県内では富士山麓にしか渡来しないオオジシギ・アカモズ・ノビタキ（写真4-16）の三種はこの地域を代表する野鳥と言える。しかし令和三年（二〇二二）現在、

この三種のうちノビタキだけは渡来が確認されているが、オオジシギ・アカモズは記録が途絶えた。

冬にはタゲリ・ツグミ・シロハラ・ジョウビタキ・カヤクグリ・タヒバリ・ベニマシコ・カシラダカなどの冬鳥が訪れ、年によってはハイイロチュウヒ・コミミズク・コチョウゲンボウも飛来する。上井出地区にある富士桜自然墓地公園では、園内の池の中の島にあったアオサギのコロニーに割り込むように平成一四年（二〇〇二）春からカワウが繁殖を始めた。その後カワウは数を増やし続け、平成二四年（二〇二二）には完全にカワウのコロニーとなる。その後さらに数は増え、令和三年（二〇二二）五月には九一個の巣と四二〇羽のカワウが確認された。



写真4-12 マミジロ

富士山二合目の自然林では、五月に入るとマミジロ・クロツグミ・アカハラ・コルリ・コサメビタキ・キビタキなどの夏鳥の音が響き渡る。



写真4-13 富士山五合目の森林限界

丈の低いカラマツが地面を這うように茂り、その下方にはダケカンバ・ミヤマハンノキ・ナナカマドなどの広葉樹林帯がある。

写真4-14 五合目で繁殖するホシガラス

森林限界で繁殖するホシガラスのほかに、このカラマツ林はイワヒバリやカヤクグリなどの繁殖地でもある。

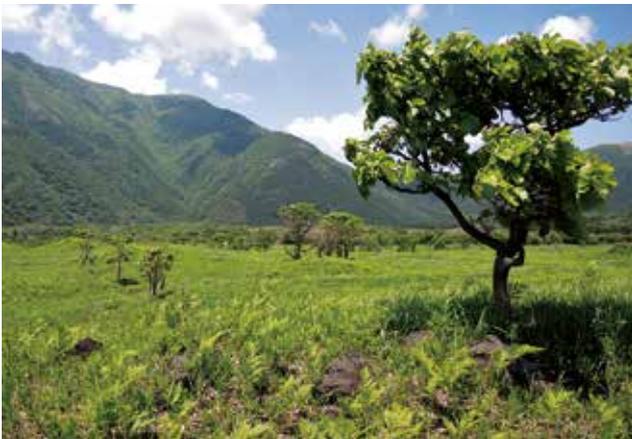


写真4-15 朝霧高原

スキの草原と畑地が混在する根原地区の草原は、市内でも貴重な草原性の野鳥の生息地である。

写真4-16 朝霧高原のノビタキ

視界を遮るものの無い広い草原を好むノビタキは、人間の開発による草原の減少で生息地が狭められている。



## 田貫湖周辺

朝霧高原の西側、長者ヶ岳の麓に市内で唯一の湖、田貫湖がある。(写真4-17) 周囲4kmほどの人造湖で、年間を通じてカルガモ・カイツブリ・カワウなど留鳥の水鳥が生息している。冬になるとヒドリガモ・マガモ・ハシビロガモ・オナガガモ・コガモ・ホシハジロ・キンクロハジロ・カワアイサ(写真4-18)などが渡来するが近年減少傾向にある。逆に数を増やしているのがオオバンで、冬季の湖面で最も多く見られる。

田貫湖に近い猪之頭地区には、一級河川の芝川の水源があり、この周囲は渡来が局地的な夏鳥のノジコの生息地である。芝川流域は過去にはヤマセミ(写真4-19)の生息地だったが、ほかの地域も含めて近年では市内でその姿を見ることはなくなった。

## 天子山系

田貫湖の西側には、北は山梨県境の竜ヶ岳から雨ヶ岳・毛無山・長者ヶ岳・天子ヶ岳・白水山と連なる天子山系がある。自然林と人工林が混在し、富士川水系の芝川・稲子川・大倉川(写真4-20)などの溪流が流れていて自然度は高い。山野に生息する野鳥の種類・数ともに多く、山が深く人の手の入らない地域も多いことから、野鳥の生態系の頂点に立つクマタカが生息している。夏鳥として日本に渡来するタカ類のサシバ・ハチクマが、富士山の北側を通過しこの山を越えて南に渡る様子が秋に観察される。

## 明星山周辺

富士宮市街地上空は、天子山系と同様に富士山の南側を通過して南に渡っていく野鳥の渡りのコースとなっている。富士宮市南部に位置する明星山の山頂からは、秋になるとサシバ(写真4-21)・



写真4-17  
田貫湖から望む富士山

田貫湖の西側には水と緑の豊かな天子山系が連なり、小鳥だけでなく、クマタカ・オオタカ・ノスリなどの猛禽類も生息する。



写真4-18  
田貫湖に飛来したカワアイサ

かつては湖一面にカモたちの姿が見られたが、周囲の開発か地球温暖化の影響か、近年その数が減ってきた。

ハチクマに加えアカハラダカ・ツミ・ハイタカ・チゴハヤブサなどのタカ類が上空を通過していく様子が、多い年には一ヶ月間で五千羽以上も観察されている(写真4-22)。この季節にはタカ類以外にもヨタカ・ハリオアマツバメ・アマツバメ・サンショウクイ・コシアカツバメ・クロツグミ・エゾビタキ・コサメビタキなどの夏鳥が南に渡っていく姿が観察できる。



写真4-19 ヤマセミ

かつて市内を流れる溪流ならどこでもみられたヤマセミは、全国的な傾向としてその数を減らし続けている。

写真4-20 天子山系を流れる大倉川

市内の溪流は多くの水生昆虫や魚類を育み、これらを捕食するセキレイ類・カワガラス・カワセミ類などの生息地となる。



写真4-21 明星山上空のサシバの群れ

上昇気流をつかんだサシバの群れは旋回飛翔で高度を稼ぎ、次々と西の空を目指して渡っていく。

写真4-22 明星山山頂でタカの渡りの観察

例年9月末から10月初めが野鳥たちの秋の渡りのピークで、明星山ではタカだけでなく林の中を渡っていく多くの野鳥が観察できる。



## 第四節 トカゲ・ヘビの仲間

トカゲ・ヘビの仲間を爬虫類ほうちゅうと呼ぶ。富士宮市に生息が確認されているトカゲ類は、ヒガシニホントカゲ・オカダトカゲ（写真4-23）・ニホンカナヘビ・ニホンヤモリである。

『学研の図鑑 爬虫・両生類』（一九七三）を見ると全国に生息しているトカゲ類はニホントカゲ・カナヘビ・ヤモリと書かれているが、伊豆半島に生息したものはオカダトカゲであることが判明した。西は富士川を境界とし、東は神奈川県さかの酒匂川さかわまで生息している。北は富士山の南麓までである。

さらに、ニホントカゲは関西を境に東西で遺伝的に異なることが判明し、東のものは平成二四年（二〇一二）にヒガシニホントカゲとして新種記載された。また遺伝的解析により、ヒガシニホントカゲとオカダトカゲの交雑個体が、富士宮市・富士市・裾野市・御殿場市・駿東郡小山町・静岡市清水区で確認されており、日本国内でここだけに見られる珍しい事例である。

ヒガシニホントカゲ・オカダトカゲ・ニホンカナヘビの三種の生息場所は草地で、昼間小さな昆虫類を餌としている。ニホンヤモリは民家の雨戸の中や隙間に隠れていて、夜になると窓や壁に張り付き、電灯の光に集まるカヤガなどを捕まえて餌としている。指先には細かな鉤状かぎじょうの突起があり、これをひっかけることにより垂直なガラス窓も登ることができる。

富士宮市でこれまでに記録されているヘビ類は、ヤマカガシ（写真4-24）・シマヘビ（写真4-25）・ヒバカリ・ジムグリ（写真4-26）である。『富士宮市の自然』（一九八八）ではアオダイショウ・マムシが記載されているが、採集地・確認地点の記載がないため生息種から除外した。



写真4-24 ヤマカガシ

全長60~120cm。水田や河川の周辺で多く見られる。主にカエルと小魚を食べる。毒蛇であるが気性はおとなしい。



写真4-23 オカダトカゲ

体長は20~25cm、体色は褐色か暗褐色。長い尻尾をもつ。子供の頃は尻尾の青が目立つ。産卵は6~7月、倒木や石の下に10cm程の巣を作り、3~15個の楕円体状の乳白色の卵を産む。メスは抱卵して孵化ふかまで絶食して卵を守る。



写真4-26 ジムグリ

全長70～100cm。体色は赤みがかった茶褐色で、黒い斑点がはいる。主に山地に生息し、地に潜ってネズミやモグラを捕食することから、ジムグリの呼び名がついた。



写真4-25 シマヘビ

全長80～150cm。背面の体色は普通わら色で、4本の黒褐色の縦縞模様が走る。カエル・トカゲ・ネズミ・小鳥・マムシやヤマカガシの幼蛇など多様な動物を食べる。気性は荒くかみつことが多い。

ニホンヤモリ	●青木平 ●栗倉南 ●外神スポーツ広場
ニホンカナヘビ	●小田貫湿原 ●朝霧高原野外活動センター ●長貫 楠金 ●上稲子 塩野 ●上柚野 桜峠 ●下稲子 ●青木平団地周辺
ヒガシニホントカゲ	●内野 法藏院
オカダトカゲ	●外神
ヒガシニホントカゲとオカダトカゲの交雑個体	●上条 大石寺境内 ●上条 大石寺周辺 ●白糸の滝周辺
タカチホヘビ	●大久保 堤 ●上稲子 森
ヒバカリ	●下稲子
ジムグリ	●朝霧高原野外活動センター ●朝霧高原牧場
シマヘビ	●半野 ●佐折 ●上井出 ●下稲子 ●内房 落合 ●下柚野 大畑
ヤマカガシ	●朝霧高原野外活動センター ●下柚野 ●下稲子 大間 ●羽鮒 坂本 ●大久保 堤 ●上稲子 神矢野 ●上稲子 西沢

表4-1 富士宮市の爬虫類の生息記録

## 第五節 カエル・サンショウウオの仲間

富士宮市に生息するカエルの仲間は、アズマヒキガエル・ニホンアマガエル・ヤマアカガエル・タゴガエル・トノサマガエル・ツチガエル・モリアオガエル（写真4-27）・シユレーゲルアオガエル・カジカガエルと、今回初めて観察された国内移入種のヌマガエル、そして特定外来生物のウシガエルの二種類である。

『富士宮市の自然』（一九八八）ではニホンアマガエルが目録に入っていたが、富士宮市には分布していないと考えられる。その理由として、河端政一（一九七二）は目録に記載したものの、広範囲を長期間調査し、ヤマアカガエル・ツチガエル・トノサマガエルを高頻度で観察しているにもかかわらず、ニホンアマガエルは確認していないからである。富士宮市に隣接する山梨県南部町など、水田地帯で標高の低い地域でもニホンアマガエルは確認されていない。（湯本 二〇〇〇）

富士宮市に生息が確認されているサンショウウオの仲間は、アカハライモリ・ハコネサンショウウオ（写真4-28）・ヒガシヒダサンショウウオ（写真4-29）の3種類である。

アカハライモリ（写真4-30）は、田んぼや緩やかな流れの小川、池で観察できる。モリアオガエルの産卵期、木の枝に産み付けられた淡黄白色の卵塊の下に、落ちて来るオタマジャクシを待ち受けるアカハライモリが何個体も集まっているのを頻繁に観察している。

ハコネサンショウウオ・ヒガシヒダサンショウウオは、毛無山を起点とする河川の源流部に生息している。ヒガシヒダサンショウウオは紫褐色の背面に黄色斑点をもち、全長一四〜一九cmでメスはオスよりも大きい。繁殖は二月〜三月に大きな岩の下でなされ、幼生（オタマジャクシ）は流れの緩やかな淵で生活するが、

大半は越冬し、翌年に変態して陸上生活に移る。

ハコネサンショウウオは、全長一三〜一九cmで体は細長く、特に尾が長い。カエルやほかのサンショウウオは、幼生が変態して陸上生活に移ると肺呼吸を行うようになるが、ハコネサンショウウオの仲間だけは肺を持たず皮膚呼吸のみで生活する。繁殖期は特異で、年二回あることが知られており、石川県宝達山では五月中旬〜七月中旬と一〇月下旬〜一二月下旬に行われると報告されている。また、繁殖周期がオスは一年おき、メスは三年おきと知られている。静岡県あしたかの愛鷹山の桃沢川の源流部で一四カ月に渡って月一回幼生の成長を観察したところ、全長約二八mmの個体が五月と八月に観察された。富士宮市の個体群も同じような繁殖をしていると考えられる。



写真4-27 モリアオガエル

直径20cmほどの白い泡状の卵塊には200〜400個の卵が入っている。小田貫湿原では約100の卵塊が観察された。（令和4年6月23日）



写真4-28 ハコネサンショウウオ

全長は13〜19cm。体は細長く、体の尾の比率はサンショウウオの仲間が一番長い。幼生は、頭の付け根に外えらと呼ばれる左右対称のえらと、指先に黒い爪を持つ。変態して陸上生活に移るまで2年以上かかる。



写真4-30 アカハライモリ

全長はオスが8.5~10.5cm、メスが10~13cm。背面は褐色から黒で腹面はオレンジから赤で不規則な黒斑がある。産卵は4~7月で池や水田の水生植物や草に1卵ずつ産み付ける。



成体

写真4-29 ヒガシヒダサンショウウオ

全長は14~19cmメスはオスよりも体が大きい。体色は紫褐色の背面に黄色斑点を持つ。産卵は2~3月で源流部の水中で集団で行われることが多い。メスは1対の卵のうを産む。卵は直径5mmで強靱な卵のう外皮で守られる。1対の卵のうには23~72個の卵を数えた。幼生は溪流の緩やかな淵で水生昆虫を食べ、大半は翌年変態して陸上生活に移る。



卵のう



幼生

有尾目	アカハライモリ	●上稲子 北ヶ谷戸 ●大岩 ●羽鮎山山頂の池 ●羽鮎 ●芝川スポーツ広場 ●鳥並
	ハコネサンショウウオ	●猪之頭 枯木沢 (標高 750m 以上) ●猪之頭 湯之奥林道の溪流 (標高 750m 以上) ●猪之頭 モミジ割沢 (標高 750m 以上) ●麓 白水沢 (標高 950m 以上) ●麓 朝日沢 (標高 950m 以上) ●稲子川支流 西沢 (標高 600m 以上)
	ヒダサンショウウオ	●猪之頭 枯木沢 (標高 750m 以上) ●麓 白水沢 (標高 950m 以上) ●猪之頭 モミジ割沢 (標高 750m 以上)
無尾類	アズマヒキガエル	●羽鮎山山頂の池 ●大岩 ●青木平 ●内房 ●富士根北小学校粟倉分校正門付近
	ヤマアカガエル	●小田貫湿原 ●田貫湖 長者橋下堰堤 ●猪之頭養鱒場 ●毛無山登山道 ●上稲子 宮地
	タゴガエル	●長貫 楠金 ●上稲子 池ノ谷 ●上柚野 桜峠 ●内房 落合 ●上稲子 塩野 ●猪之頭 芝川上流
	トノサマガエル	●田貫湖
	ツチガエル	●田貫湖
	ニホンアマガエル	●猪之頭養鱒場 ●北山本門寺 ●半野 ●佐折 ●上井出 ●長貫 楠金 ●上柚野 西村 ●鳥並 ●大久保 堤 ●羽鮎 坂本 ●上稲子 西ヶ谷戸 ●西山 蒲沢 ●芝川スポーツ公園
	モリアオガエル	●小田貫湿原 ●半野 ●佐折 ●上井出 ●麓 朝日沢
	シュレーゲルアオガエル	●小田貫湿原
	カジカガエル	●内房 落合 ●上稲子 池ノ谷 ●上稲子 宮地
	ヌマガエル	●沼久保
ウシガエル	●沼久保	

表4-2 富士宮市の両生類の生息記録

## 第六節 富士宮市の魚

富士宮市は海岸線こそ持たないが、駿河湾に注ぐ富士川や潤井川、さらにはその支流が、市内各所を流れる。そのため本市域では、コイやフナ類のように一生を川や湖沼など淡水域で過ごす「純淡水魚」だけでなく、ニホンウナギやアユなど、生活史の中で川と海とを行き来する「通し回遊魚」も見ることができ、河川以外にも、田貫湖を始めとする大小さまざまな湖沼や貯水池、田畑を潤す灌漑用水など、富士宮市域の水環境は淡水魚に多様な生息環境を提供している。豊富な湧水を背景とした淡水魚養殖も盛んで、特にニジマスの養殖収穫量は日本一の規模を誇る。

本市域の魚類相、すなわち「富士宮市にはどんな魚が何種生息しているのか？」については、一九七〇年代から近年に至るまで、定期的に調査・報告されてきた。それらの報告や標本・画像などを整理すると、少なくとも表4-3にあげた三九種を確認できる。この数は、県内でこれまでに確認されている淡水魚全体の約二割に相当する。多いとは言えない数値だが、河口周辺に多産する汽水性魚類が含まれないことを考えると、さほど少ないわけではない。今回まとめた表は、あくまで暫定的なものだ。実は本市域の魚類相は十分に理解されているとはいえない。原因は大きく二つある。まず、①これまで国内外の各地から多くの魚種、すなわち外来種が人の手により持ち込まれてきたこと。そして、②かつての調査報告でも、多くは証拠となる標本や画像が明示されていないこと。

①の外来種には、海外から日本に持ち込まれた「国外外来種」だけでなく、日本国内の各地、時には県内の他市町から持ち込まれた「国内外来種」も含まれる。表を見ても分かるように、いま

市域で見られる魚種の多くが外来種である。導入時期は種によりさまざまだが、いずれも江戸時代以降、大半がここわずか数十年の間に起きた変化だ。結果、増える魚もいれば、いつしか減少・消失する魚もいた。魚類相が不安定で、その時々の実態が見えにくい。

外来種と聞いてすぐ思い浮かぶのは、地域の生物多様性への影響が特に大きい侵略的外来種だろう。代表格のオオクチバスやブルーギルなどは、捕食による影響の深刻さから、国が定める「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（通称：外来生物法）の「特定外来生物」に指定され、飼養や保管、運搬などが禁じられている。

対照的なのはニジマスだ。オオクチバスなどと同じ国外外来種でありながら、重要な養殖対象魚であること、養殖魚が遊漁（釣り）用に放流されても大半が直後に釣獲されてしまうこと、本州以南の自然河川に定着した例はごく一部にとどまることなどから、現状、県内ではさほど問題視されていないようにも見える。養殖の歴史の長さもあってか、ニジマスが外来種と聞いて驚く人もいるほどだ。

国内外外来種の場合、本来の放流対象種だけでなく、それらに混じり持ち込まれ、ひそかに定着してしまう種も少なくない。もともと地域に同じ種が生息していた場合など、放流された他地域のものとの交雑・遺伝子汚染により、長い歴史が培ってきた地域集団の特性が失われる恐れもある。見た目ではよく分からないまま、いつの間にか浸透していく恐ろしさが国内外外来種にはある。

②の問題は、後に第三者が報告内容を検証できないことだ。身近な淡水魚ではあるが、その分類には近年も変更や修正が加えられ続けている。従来同種とされていたものが複数種に分割される例もあり、

目	科	種	備考	情報源 <sup>※2</sup>
ウナギ目	ウナギ科	ニホンウナギ	「ウナギ」と報告されたものも含む	1, 5
サケ目	サケ科	ニジマス	外来種（国外外来種）；養殖場や管理釣り場からの逸出等	3, 4, 5, 7
		ヤマメ（サクラマス）	外来種（国内外来種）	1, 3
		アマゴ（サツキマス）	放流により、国内外来集団との交雑による遺伝的攪乱が懸念	2, 3, 5, 6
		ギンザケ	外来種（国内外来種）；養殖場からの逸出	5
		イワナ類 <sup>※3</sup>	外来種（国内外来種）	5
		カワマス	外来種（国外外来種）；「猪之頭で確認」とあり	3
キュウリウオ目	アユ科	アユ		1, 2, 5, 7
	キュウリウオ科	ワカサギ	外来種（国内外来種）	3
コイ目	コイ科	アブラハヤ		1, 2, 3, 4, 5, 7
		ウグイ <sup>※3</sup>	「マルタ」と報告されたものも含む	1, 2, 5
		オイカワ	外来種（国内外来種）	1, 2, 7
		カワムツ	外来種（国内外来種）	6, 7
		カマツカ	山梨県内の富士川水系からカマツカとスナゴカマツカとの交雑個体の報告例あり	1, 2, 5, 7
		タモロコ	外来種（国内外来種）	4, 5
		モツゴ		2, 5, 7
		コイ	少なくとも現在市内に生息するものは、おそらく国外産種あるいはそれとの交雑集団	1, 2, 3, 4, 5, 7
		ギンブナ <sup>※3</sup>	「マブナ」「キンブナ」と報告されたものも含む	2, 3, 4, 7
		ゲンゴロウブナ	外来種（国内外来種）；「ヘラブナ」と報告されたものも含む	3, 4, 5
		キンギョ	外来種（国外外来種）	5
		タイリクバラタナゴ	外来種（国外外来種）；「タナゴ」と報告される例が多い	1, 4, 5
	ヤリタナゴ <sup>※3</sup>	外来種（国内外来種）	5	
	ドジョウ科	ドジョウ		1, 2, 3, 4, 5, 6, 7
		ヒガシシマドジョウ	「シマドジョウ」と報告されたものも含む	1, 2, 5, 6, 7
ホトケドジョウ			1, 4, 6, 7	
ナマズ目	ナマズ科	ナマズ	外来種（国内外来種、ただし導入時期は江戸時代以降と推定）	1, 2, 5, 7
ダツ目	メダカ科	ミナミメダカ	「メダカ」と報告されたものも含む；在来集団が移入によるものかは未調査 <sup>※4</sup>	1, 5, 7
スズキ目	カジカ科	アユカケ（カマキリ）		1, 5
		カジカ		1, 2, 3, 5, 6, 7
	サンフィッシュ科	オオクチバス	外来種（国外外来種）	4, 7
		ブルーギル	外来種（国外外来種）	7
	タイワンドジョウ科	カムルチー	外来種（国外外来種）；「タイワンドジョウ」「ライギョ」と報告されたもの	5
	ハゼ科	カワヨシノボリ		1, 2, 6, 7
		シマヨシノボリ		2, 7
		ルリヨシノボリ		2, 7
		オオヨシノボリ		2, 7
		その他のヨシノボリ類	複数の外来種（国内外来種）の生息可能性あり（「トウヨシノボリ」と報告されたものも含む）；標本に基づく検証（再同定）が必要	5, 7
		ヌマチチブ	「チチブ」と報告されたもの；標本に基づく検証（再同定）が必要	1, 2
ボウズハゼ		2, 7		

表4-3 富士宮市域で確認されている淡水魚<sup>※1</sup>

※1 市内に各種の外来集団のみが見られる場合は備考欄に「外来種」と記したが、在来と考えられる集団もいる場合には、国内外来集団の導入例があっても記さない

※2 情報源：1) 芝川町（1973）、2) 板井（1982）、3) 富士宮市（1988）、4) 富士宮市（1995）、5) 富士宮市（2005）、6) 静岡県くらし・環境部環境局自然保護課（2019）、7) 標本・画像

※3 種同定や分布については本文参照

※4 富士宮市（2005）に「富士宮には天然種のメダカの確認ができない」「アブラハヤとタカハヤの稚魚を富士宮ではメダカと呼んでいる」「平成10年に水田にヒメダカを放流」という記述もあり、おそらくは国内外来種

その場合、標本や画像でも残されていない限り、時にはDNA解析用の組織標本が残されていない限り、正確な種の再同定が難しい。単純に種同定に疑義が生じた際なども、証拠が残されていないければ、報告者を「信じる」しかない。よほど明瞭な状況証拠でもあれば別だが、多く場合そうした記録は採用困難となる。

実際、かつて報告された魚種であっても、証拠不十分のため先出の表に掲載していないものがいくつかある。例えば『芝川町誌』（一九七三）に掲載されたオオウナギやマルタウグイ、キンブナ、ドンコ、ジュズカケハゼなどが、それだ。

オオウナギは県内各地から記録があるが、大半は河口付近で採集された「しらすうなぎ」状の幼魚だ。南方系の種であり、大きく成長したものは、県内では温泉水などの影響により水温が高めな陸水域でまれに採捕されるに過ぎない。富士宮市の場合は、海からの距離や豊富な湧水による冷涼な水環境の多さを思うと、本種が生息する可能性は低い。大型のニホンウナギの誤同定である可能性も捨てきれない。

マルタウグイは、近似種ウグイの誤同定であろう。本種（標準和名はマルタ）の県内における正確な分布記録はなく、例えば板井（一九八二）は、安倍川や大井川で同様にマルタと呼称されていた魚を海から溯上する回遊型のウグイと再同定した。富士宮市域のウグイが回遊型か一生を河川で過ごす河川型かについては、精査を要する。キンブナは、市域によく見られる近似種キンブナが掲載されていないことから、その誤同定である可能性が高い。

ドンコとジュズカケハゼも、前者でわずかに人為的移入によるものと思われる集団が県中部の一部で確認されているに過ぎない。富士宮市内での記録は、いずれも実際の標本や写真を確認しない限り正体は判然としないが、カジカか他のハゼ類かの誤同定だろうか。

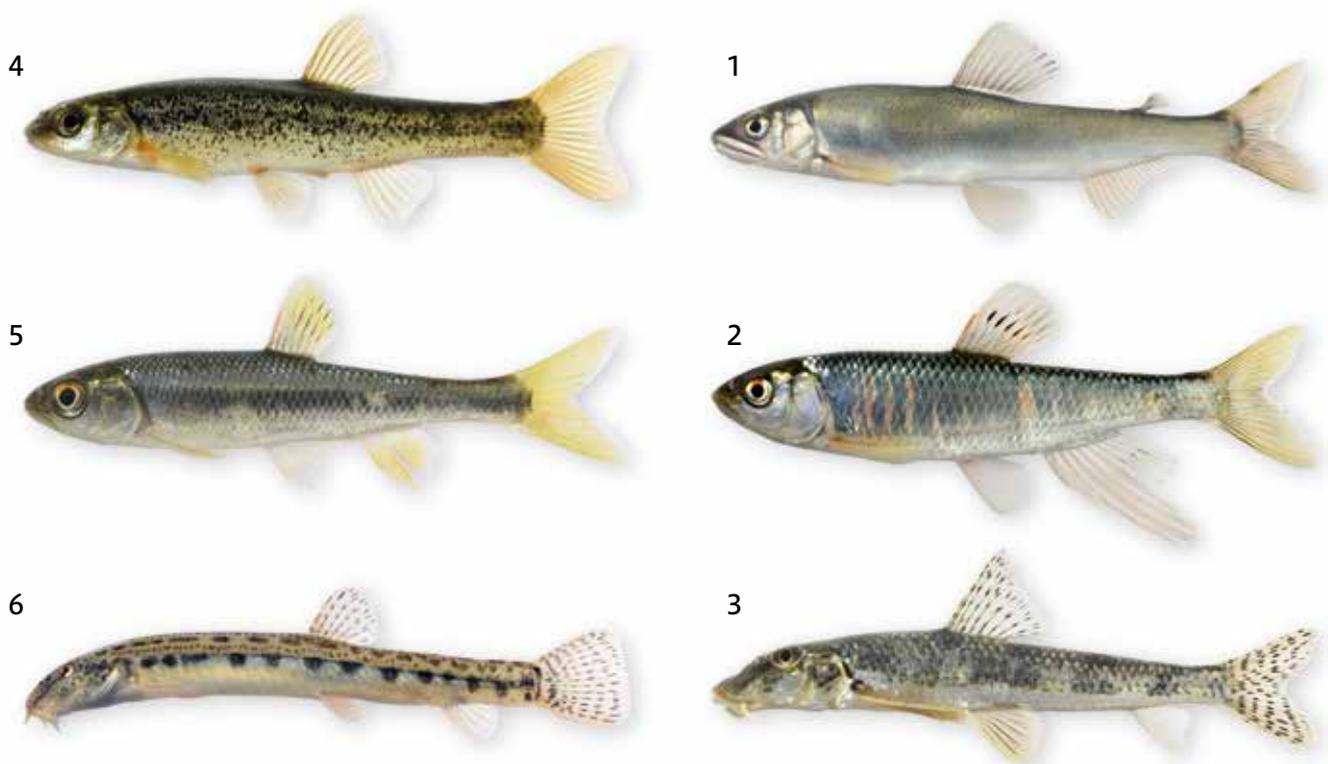


写真4-31 富士宮市域で採集された淡水魚

- 1 アユ 2 オイカワ 3 カマツカ 4 アブラハヤ 5 カワムツ 6 ヒガシシマドジョウ

『富士宮市の自然』(二〇〇五)では、タカハヤが掲載されている。市域に多産する近似種アブラハヤとは別に記し、それとの識別点もあげているものの、残念ながら標本や画像などは示されていない。板井(一九八二)や静岡県くらし・環境部環境局自然保護課(二〇一九)などの全県調査では富士宮市域からタカハヤの採集記録がなく、本種もやはり、実際の標本に基づく検証が求められよう。

同書で市内各所から記録されているイワナは、亜種の別(ニッコウイワナかヤマトイワナか)が定かでないため、表ではイワナ類とした。本種について板井(一九八二)は「富士川水系では山梨県側には生息するが、静岡県側の本支流にはまったくいない」と記しており、おそらく後年に導入された国内外来種と推察される。なお同氏は二〇〇〇年にはすでに市内の芝川水系にて本種を目視確認している(板井隆彦氏私信)。

同様に、かつて田貫湖に生息していたというヤリタナゴ、同湖や水久保貯水池などで記録されたタモロコも、市域では国内外来種となるものであろう。田貫湖ではハクレンの放流例もあるというが、その後の記録が見当たらず表では割愛した。

魚は水中の生物であり、その変化は陸上生物に比べて気づかれにくい。先日ある機会に市内の富士川水系を訪れた際には、従来の報告で記録の少ないカワムツ(国内外来種)などが普通に見られた。違和感を覚えつつ、やはり、という思いも浮かぶ。もとより自然は変化していくものだ。とはいえ、本来ならば長い年月をかけて培われてきたはずの地域の魚類相が、人間活動の影響により、いま急激に変貌を遂げつつある。地域の魚類相の「らしさ」とは何か。何を守り、次代に継承していきたいか。まずは実態を正確に把握するためにも、今後も網羅的な調査の継続が必須となろう。調査結果を保存する標本や画像の保存・データベース化も肝要だ。



写真4-31(続き) 富士宮市域で採集された淡水魚

- 7 ナマズ 8 カジカ 9 ボウズハゼ 10 カワヨシノボリ 11 シマヨシノボリ  
12 オオヨシノボリ 13 ルリヨシノボリ

## 第七節 富士宮市の昆虫

昆虫は節足動物門の綱の一つで、世界で百万種以上、日本でも四万種以上が知られる膨大な種数を誇る動物群である。小型で目につきにくいものが多い上に、小さなものほど研究者も少ないことから、いまだに発見・命名されていない種も多いと考えられている。未知の種を含めると日本には一〇万種以上の昆虫が生息していると考えてよいだろう。静岡県内の昆虫については「静岡県野生生物目録」に取りまとめられていて、蜻蛉（トンボ）目一〇〇種、直翅（バッタ）目一四九種、半翅（カメムシ）目八六五種、鞘翅（甲虫）目五〇二七種、チョウ目二一三八種、アリ科一〇五種などがあげられている。種数が多い上に調査が不足している膜翅（ハチ）目や双翅（ハエ）目については、いまだリスト化がなされておらず、どんな種が県内に生息しているかは明らかになっていない。

富士宮市に生息している昆虫についてのまとまったリストはないものの、富士山は古くから昆虫の研究が行われてきた場所である。また、チョウ目については全県的に詳細に調べられていて、富士宮市域についても多くのことが分かっており、『富士宮市の自然』（二〇一三）では一〇九種がリストアップされている。本節では、本市における特徴的な昆虫について述べる。

## 富士山の昆虫

富士山はその標高によって植生をはじめとする環境が大きく変わり、そこに生息する昆虫の様相も大きく変化する。その一連のダイナミックな変化を連続的に見ることができなのが、富士山の特性であり魅力でもある。

## 富士山頂の昆虫

山の頂上部には風によって多くの昆虫が低地から吹き上げられてくる。富士山頂でも国立公園協会編（一九七二）や篠田（二〇一四）に記載されているように、キアゲハ・オニヤンマ・カメノコテントウなどいろいろな昆虫を確認することができる。これらは高山性のもではなく、植生のない富士山頂では生息することができず、自力で再び低標高の生息地に飛んで戻ることができなければ死滅してしまふものである。こうした富士山頂で見ることのできる昆虫たちは、昆虫がしばしば風によって長距離を運ばれることを教えてくれ、そのなかには新しい好適な生息地に偶然たどり着けるものたちもいるであろうことを想像させてくれる。



写真4-32 コバネヒナバッタ

翅が退化しており、飛翔力はない。富士山の個体群は周囲の溶岩に似た黒い体色が特徴。

## 高山帯

富士山は高山性生物が少ないことが一つの特徴であるが、特筆すべき高山性の昆虫が知られている。それは、コバネヒナバタ(写真4-32)というサハリン南部、北海道東部から本州の高山帯に点々と分布するバタの仲間である。この種の富士山での発見は平成一八年(二〇〇六)のことで、石川均氏(いしかわひとし)によって発見された。本州の高山帯に見られるものは山塊ごとに別の亜種に分類されており、富士山のもは未命名であるが独立の亜種と考えられている。このバタは高山帯の荒原植生に生息しているが、文字通り「小翅せうし」のため飛翔能力はなく、富士山が活発に活動する前の時代にすでに富士山にすんでいたものが、噴火の影響の中でもなんとか生き延びて現在に至っているものと考えられる。他の高山性生物が滅んでいったなか、奇跡的に残存している種だと言えるだろう。

また、フジシロミヤクヨトウ(写真4-33)は、ヤガ科に属する蛾がで、日本では富士山の五合目付近のみで生息が確認されている種である。幼虫は森林限界を超えた砂礫地されきに生えているマメ科のムラサキモメンヅルを食草としている。ムラサキモメンヅル自体は北海道南部から本州に点々と生育地があるが、本種は日本では富士山にしか見られない。しかし、国外に目を向けるとヨーロッパからシベリア南部にかけてのユーラシア大陸北部に広く分布する。こうした分布から考えると、この蛾がは氷河期の生き残りの高山性生物と言えるだろう。

## 亜高山帯から落葉広葉樹林

冷涼な気候の亜高山帯では、カラマツ・シラビソ・コメツガなどの針葉樹林が優占し、そうした針葉樹林を利用するオオクロカミキリ・トドマツカミキリ・アラメハナカミキリといった特徴的



写真4-34 朝霧高原の草原(昭和46年<1971>)

この草原にはホシチャバネセセリ・アサマシジミが生息していた。この2種のチョウは富士宮市のみならず、静岡県内から姿を消した可能性が高い。



写真4-33 フジシロミヤクヨトウ

翅の開長は36~42mm。年に一回、7月頃に成虫が出現する。日本では富士山でしか見ることができない。

なカミキリムシが生息している。落葉広葉樹林にはたいへん数多くの昆虫たちが生息しており、西臼塚<sup>にしうすづか</sup> 一帯などは昆虫の観察にたいへん好適な場所である。和名に「富士」を冠する唯一のチョウであるフジミドリシジミは、北海道南部から九州にかけて生息する日本固有種である。この種は日本の近代昆虫学を築いた松村松年<sup>まつむら まつねん</sup>が、表富士において明治二十九年（一八九六）に採集し、自ら明治四三年（一九一〇）に命名記載したものであるのだが、富士山ではむしろ珍しい種で見つけることができれば幸運だ。

### 草原性の昆虫

富士山の裾野には広大な草原が広がっており、富士宮市域でも朝霧高原などにこうした景観を見ることができ（写真4-34）。こうした草原は元々、富士山の火山活動による影響で成立し、その後、人々の生活の中で利用されることで維持されてきた生態系である。こうした環境に特徴的なチョウとしてホシチャバネセセリ（写真4-35）・ヘリグロチャバネセセリ・ギンイチモンジセセリ・ヒメシロチョウ（写真4-36）・ゴマシジミ・ヒメシジミ・アサマシジミ（写真4-37）・ヒョウモンチョウなどをあげることができる。しかしながら、環境の変化によってこうしたチョウの多くが絶滅・激減してしまった。周辺の疎林に生息するヤマキチョウ・ハヤシミドリシジミ・キマダラモドキなども同様の経過をたどってしまっている。

### 謎の多いアリ・アギトアリ

平成二六年（二〇一四）に突然、目立つ大顎<sup>おほあご</sup>をもつ日本最大級の蟻<sup>あり</sup>・アギトアリ（写真4-38）が白尾山公園<sup>しろお</sup>で発見された。このアリは南西諸島に分布するものだったが、二〇〇〇年代以降、東京・



写真4-36 ヒメシロチョウ

環境省レッドデータブック絶滅危惧IB類、静岡県レッドデータブック絶滅危惧II類。幼虫の食草はマメ科ツルフジバカマ。朝霧高原の一部に細々と生息している。



写真4-35 ホシチャバネセセリ

環境省レッドデータブック絶滅危惧IB類、静岡県レッドデータブック絶滅危惧IA類。1980年代までは朝霧高原に多かったが、90年代に激減し、2003年を最後に姿は見られない。

神奈川・三重・大阪・岡山で続々と見つかりだしていたものだった。富士宮市での生息確認の報告の後、これまで記録のなかった高知・大分・栃木でも発見されている。なお、静岡県内ではまだ富士宮市からしか見つかっていない。なぜ、突然このアリが各地で、そして富士宮市で見つかりだしたかについては謎である。在来種でひっそりとくらしていたものが、急に見つかりだしたという可能性は、このような目立つ大型のアリではあまりなさそうである。

実は日本ではアリの調査研究が進んでいて、全国各地にどんなアリが生息しているかという情報は少しずつ判明している。そうすると近年の温暖化の影響を受けて自力で分布を拡げたか、もしくは人為的に（おそらくは非意図的に）持ち込まれた外来種ということになる。これについて森林総合研究所の砂村栄力氏は興味深い説を展開している。それは、新たにアギトアリが見つかった場所は駐車場に近いところが多く、人間が車で（知らずに）運んできたのではないかというものである。今後、各地で検証が進めば由来が明らかになるかもしれない。富士宮市のアギトアリの分布は拡大するのか？生態系への負の影響はないのか？今後、注目していきたいテーマである。

昆虫の世界は広くて深い。種数が非常に多いこともあり、未知のこともたくさんある。市域にどれだけの昆虫が生息しているかということも明らかになっていないし、新たな侵入種や絶滅していくものたちもいる。そうした基礎的な調査を行い、変遷を見守っていくことは自然の理解にとって重要なことである。そして、そのような情報・知識を知ること、生態系の一員としての昆虫に興味を惹かれ、身の回りの自然に関心を寄せ、自然の豊かさ大切さを感じる方が少しでも増えることを願っている。



写真4-38 アギトアリ

体長は10mmを超える。目立つ大顎を180度開いて歩き回り、大顎の根元付近の感覚毛に獲物が触れると素早くつかまえる。大きな獲物に対しては腹端の毒針も使用する。



写真4-37 アサマシジミ

環境省レッドデータブック絶滅危惧IB類、静岡県レッドデータブック絶滅危惧IA類。静岡県内では富士宮市からのみ知られていたが、近年は確認記録がない。